

B 言語への通訳——日本の経験 アンケート調査報告

近藤 正臣
(大東文化大学)

はじめに

本報告は、私たち日本の通訳者が、第 2 言語 (AIIC 国際会議通訳者協会の分類では B 言語、ここでは実際には主として英語をさす) への通訳をどのように行っているか、それをどのように認識しているかを知ろうとして、通訳者へのアンケート調査を行ったものについて報告するものである。通訳者たちにアンケートへの回答をお願いしたものなので、主として通訳者たちの B 言語への通訳をめぐる自己認識を主題としている。

これまで長い間、AIIC を中心としてヨーロッパでは、通訳を行う際の方向として母語ないし第 1 言語 (AIIC の分類では A 言語) に通訳するのが是だという考えが暗黙ないし明示的にあった。しかし、いうまでもなく、日本を始めとして非西洋諸国のほとんどでは、われわれ日本人通訳者が、あるいはそれぞれの非西洋語を母語とする通訳者が、英語・フランス語・ドイツ語・スペイン語などへの通訳も、当然の仕事の一部として行ってきた。

ところが近年、EU (欧州連合) の拡大によって、使用言語が 15 にもなり、その言語・文化の多様性を守っていくとなると、A 言語への通訳を原則とする方針は貫徹なくなる。英語やフランス語を母語とする通訳者が、ハンガリー語、フィンランド語 (ともにウラル語族で、後者は自称スオミ語) はいいうにおよばず、エストニア語、ラトヴィア語、リトアニア語 (もっともエストニア語、ラトヴィア語は、スラブ語族と近い関係にあるがインドヨーロッパ語族とされている) までカバーしなくてはならなくなる。したがってヨーロッパでも B 言語への通訳が注目されるようになってきている¹⁾。

こうした状況を踏まえて、日本の B 言語への通訳の体験を総括してみようというのが本調査の趣旨である。B 言語への通訳に関する限り、日本などアジアのほうがはるかに多くの経験をしている。ひょっとしたら、今度こそは何らかの教訓が日本の経験から得られるかもしれないという密かな望みもあった。

KONDO Masaomi, "Interpreting into B Language -- Japanese Experience.."

Interpretation Studies, No. 5, December 2005, Pages 261-283

(c) 2005 by the Japan Association for Interpretation Studies

これに先立って、すでに韓国では Lim Hyong-Ok 教授が同様の調査を発表されている²⁾。本調査では、Lim 教授のアンケートをほぼそのまま踏襲することによって、日韓の比較をも行おうとした。日韓間にもきわめて興味深い差異が浮上した。

本論は、本誌への掲載に先立って、フィンランドのタンペレで 8 月に行われた FIT (国際翻訳者連盟)の大会で(および 12 月発行の Proceedings にその縮小版が)発表されている。ところが、調査自体は日本語で行われたのに、英語での発表では回答者の生の声を反映できず、発表時間・字数も限られていたし、そもそも日本に直接に関係することである。この日本語版では、できるだけ回答者の表現をそのまま生かす形で報告させていただき、筆者自身が日本語を母語とする通訳者として 40 年近く仕事をしてきたことを踏まえて、ささやかな問題提起をさせていただく。

なお、以下、英語への通訳は「into English」、日本語・韓国語への通訳は「into Japanese」「into Korean」ないし「into J/K」などと表記する。これは単純に、この部分だけはこのように英語で表記したほうがこの部分が強調されて、読む際に読みやすいからである。変則的な表記であることは重々承知であるが、了承されたい。

以下、まず、第 1 部で日本での調査の結果と、韓国で Prof. Lim, Hyang-Ok のされた調査の結果を併記する。日韓の比較を可能にするために、ここでは数字はすべてパーセントで示す(問 5、6 のみは複数回答をよしとし、実数をも併記)。さらに、第 2 部で自由記述部分の結果を提示する。第 3 部で、ささやかなる分析を加えたあと、いくつかの提案をさせていただく。

なお、韓国での研究では韓英通訳のみについて調査が行われている。本調査では、何人かの日仏・日独通訳者にもお答えをいただいた。しかし、その数はきわめて少数で、意味のある統計的な処理をすることができない。したがって、以下の集計ではそれを計算に入れていない。ただし、叙述的に触れる部分ではおおいに参考にさせていただいた。日仏・日独通訳者の回答者にはこの点のご了承をお願いしたい。

1. アンケート集計結果

まず、アンケートの質問項目およびその集計部分の結果を、日本と韓国を併記して示す(表)。回答実数は、日本 81 (アンケート発送数 161)、韓国 21 (アンケート発送数 45) で、回答率は日本が 50.3%、韓国が 46.43%であった。

表 非母語(主として英語)への通訳に関する調査結果

項目	質問内容	日本での結果	韓国での結果
1	これまで何度、仕事をしているか		
	100 回以下	3.7%	53%
	100 回から 300 回	2.5%	33%
	300 回以上(韓国のみ)	--	14%
	1000 回(日本のみ)	13.7%	--

	1000 回以上(日本のみ)	80%	--
2	通訳形態：逐次通訳をしてきた比率/同時通訳をしてきた比率		
	0%：100% の方	2.5%	0%
	10%：90% の方	7.5%	5%
	20%：80% の方	18.7%	5%
	30%：70% の方	22.5%	0%
	40%：60% の方	10%	19%
	50%：50% の方	18.7%	19%
	60%：40% の方	11.2%	5%
	70%：30% の方	5%	9%
	80%：20% の方	0%	5%
	90%：10% の方	3.7%	28%
	100%：0% の方	5%	5%
3	into English の通訳をしているおよその比率		
	0% の方	0%	0%
	10% の方	2.5%	0%
	20% の方	7.5%	5%
	30% の方	9%	9%
	40% の方	28.75%	19%
	50% の方	31.25%	33%
	60% の方	7%	19%
	70% の方	2.5%	14%
	80% の方	0%	0%
4	どちら方向をより comfortable と感じているか		
	into English の通訳をしている時	18.75%	24%
	into J/K の通訳をしている時	45%	19%
	どちらの方向でもほぼ同じ	36.25%	57%
5	into English がより comfortable だと感じる理由（実数および問 4 で into English をより comfortable と答えた人数との比率）		
	日本語（韓国語）の理解が容易	15 名（100%）	2 名（40%）
	英語のほうが話すのが得意	4 名（26.6%）	2 名（40%）
	英語のほうが思想などを表現しやすい	4 名（26.6%）	2 名（40%）
	聴衆にいい印象を与えられる	0（0%）	0（0%）
	少人数しか聴いていない	2 名（13.3%）	0（0%）
	英語を聴く人のほうが寛容(日本語のみ)	3 名（20%）	--
6	into Japanese がより comfortable だと感じる理由（実数および問 4 で into Japanese をより comfortable と答えた人数との比率）		
	母語なので、うまく表現できる、処理できる	29 名（80.5%）	5 名（120%）*
	英語は話すより聴く・理解するほうが得意	11 名（30.5%）	1 名（25%）
	母語への通訳が原則だと思う	4 名（11.1%）	0（0%）
	パートナーの日本（韓国）語より自分の日本（韓国）語がいい	0（0%）	0（0%）

7	into English は逐次・同時でしやすさが変わるか		
	変わらと思う	46.25%	19%
	変わらとは思わない	53.75%	81%
7a	into English の場合、		
	どちらかと言えば逐次通訳のほうがいやだ	61.76%	0%
	どちらかと言えば同時通訳のほうがいやだ	38.23%	100%
8	into English にはどのようなむづかしさがありますか（日本語のみ）		
9	英語国に1年以上暮らしたことがありますか。その経験が通訳になる上で、あるいは into English の通訳をする上でどのような影響を及ぼしているとおもいますか（日本語のみ）		
10	その他のコメント		

数字はその多くが自明であるが、手短に触れよう。

第1, 第2項目：第1項目および第2項目は、回答をいただいた通訳者たちのプロとしてのプロフィールを示している。日韓の差が明らかである。韓国では経験100回以下の回答者が半分以上を占めているのに対して、日本ではなんと経験1,000回以上の回答者が80パーセントを占めている。日本では、回答者がJCSのリストに登録されている人たち、それに筆者が個人的になんらかの連絡・接触のある人たちであることから、ともに多くがベテラン通訳者になった。プロとして成熟した人たちの見解を聞くことになる（その成熟の過程で into English を捉える捉え方がどのように変化したかにも関心があるが、今回はここまでは踏み込めなかった）。また、この方たちがかなりの程度まで日本の会議通訳界を代表していると解釈してもいいのではないかとと思われる³⁾。

韓国の事情については、Lim 教授に問い合わせたところ、おおよそ次のような返事であった。「実は、韓国では通訳者として経験が浅いのが一つの問題である。通訳者の平均年齢がかなり若い。はじめは通訳職自体が若いからだろうと推測したが、私どもの大学院で会議通訳者の訓練を始めてから26年もたっているのに依然として通訳者の年齢は若い⁴⁾。通訳者が定着しない理由は、優秀な通訳者はそもそも有能で、数年たつと転職してしまうことである。最近も、国際弁護士、コンサルタント、大学教授などになっている」⁵⁾。

韓国に比較すれば、日本では明らかに定着率が高いということになる。この差異については別に研究が必要になると考えられる。たとえば他職業との経済的地位の比較（収入、労働条件、雇用形態など）、社会的地位の比較（通訳職を通訳者自身がどう見ているか、および社会一般がどう見ているかの双方を見る必要がある）などは興味深い。日本では大学側で「通訳などは学問ではない、大学で教えるべきものではない」「あんなものは英語がぺらぺらならだれにでもできるんだろう」などの見方もまだ消

えていないようである。逆に、たとえば大学教員の間では、「通訳をしている」と言えば、アルバイトで稼いでいると思われたり、通訳をしているだけでそれぞれの分野の専門家とはみなされないため、これを隠している通訳者もいる（あるいは、つい最近までそうであった）。ただし、高校生、大学生の間では通訳職は人気が高く、コース名に「通訳」とつく多くの学生が殺到する。学生の要望が多いため、そのようなコースを設定するところも多い。しかし韓国でも通訳職は人気が高いことは註（註 4）にも記した通りである。

同時通訳と逐次通訳の比率は、日本のほうがわずかに逐次通訳が少ないということが見てとれる（韓国側の調査で、逐次通訳をする割合がおおよそ 90 パーセントと答えた人が回答者の 28 パーセントとなっているのは解釈に迷うが、逸脱と見ることも可能ではなかろうか）。

第 3 項目：第 3 項目以下がこの調査の重要な部分である。まず、into English が全体の仕事の何パーセントになっているかを見ると、日本では 30～50 パーセントという回答者が全体の 80 パーセントに達していることがわかる。もし、「あなたの into English の比率は 30～50 パーセントですか」と問えば、80 パーセントの回答者が「そうだ」と答えることになる。韓国では into English の比率が 40～60 パーセントと答えた回答者が 73 パーセントにのぼる。

日韓両国で、実際に通訳をしているときにその仕事の 30～60 パーセントが into English だと見てよいだろう。これは、実は、日韓両国の通訳者は両方向の仕事を現実として行っているということで、ヨーロッパで望ましいとされている「母語への通訳」という方式とは現実とは決定的に異なっていることが確認できる。

第 4 項目：第 4 項目はどちらの方向の通訳を行うのがより comfortable と感じているかという問いである。まず日本ではなんと回答者の 45 パーセントが into Japanese を好んでいる。韓国での into Korea を好む回答者の比率 19 パーセントと比べても高い数字である。仕事の半分近くが into English であるにもかかわらず、実は半分近くの通訳者が into Japanese のほうが気持ちよく仕事ができると思っているのである。

ところが、into English についてどう感じているかを見ると、into English のほうがより comfortable な回答者と、方向を問わない回答者とを足すと、日本でも 55 パーセント、韓国では 81 パーセントにもなる。つまり、これだけの通訳者が into English を特に負担とは思っていないということを示していることになる。実はこの数字のほうの意味があろう。それにしても into English を厭わない回答者の比率は韓国のほうが高い。

第 5、第 6 項目：第 5 項目と第 6 項目はそれぞれ、into English および into Japanese・into Korean のほうがより comfortable だと感じる回答者にその要因を聞いたものである。複数回答を許すので、全体は 100 パーセントを超える。なお、韓国の調査ではパーセントの数字は回答者全員に占める割合が示されているため、これを、「into English

および into Korean をより comfortable と感じる」人数を母数とする比率に換算したのもも挙げている。実は、これらの問いは「into English を気にしないでしている」通訳者全員に答えていただいたほうがよかったかもしれない。

日本では、「日本語の理解が容易だから」という要因を全員が挙げている。つまり、聴いて理解しなくてはならない起点言語が母語であるから、その理解にそれほど気を使わなくて済む、「努力 (effort)」を注がなくて済む、したがって英語によるアウトプットの産出により注意を向けることができる、というわけである。その他の要因はあるにはあるが、これらを挙げた回答者は圧倒的に少ない。これ以外の要因についてはコメント部分を見られたい。韓国では「母語の理解が容易だ」との答えもあったが、他の要因も同じように挙げられている。Into Japanese が好まれる理由は、圧倒的に「日本語は母語なのでうまく表現できる、なんとか処理ができるから」というものが半数を超えている。韓国でも同様である。

ヨーロッパでは母語への通訳が原則とされているのに対して、「母語への通訳が原則だと思う」との回答者は、日本では 4 名 (11.1%)、韓国では 1 人もいない。また、「非母語への通訳をしていることを意識していなかった」(J10) / 「into A も into B も『あたり前』のこととして訳出してきたため、深くこの問題について考えたことがなく、また振り返ってみても into A, B に起因する違いや困難さの傾向をまとめることができません」(J7) という回答者もいる。

第 7 項目：第 7 項目および付属の項目 (7a) は、into English をするならば同時がつかいか逐次がつかいかを問うたものである。日本でも通訳の形態は関係ないと感じる回答者が過半数であるが、韓国ではこれが 81 パーセントと圧倒的である。そして、形態が関係すると答えた方に、その場合、どちらの形態の通訳をするのがつかいかを問うたもの (7a) については日韓の差異が大きい。韓国では回答者全員が同時を嫌い、日本では回答者の 61 パーセントも的人が逐次を嫌っている。「絶対に逐次のほうがいやだ (into English の場合)」(K13) (個々のコメントの後に K1、J1 などと記したのは、回答者に整理番号をつけたものである) という回答者もいる。

この差異の理由は不明である。ただ、日本人通訳者が逐次を嫌う理由としては、自由記述部分へのコメントから、「同時通訳で通訳ブースに入ってしまったほうが聴衆から見えなくていい」「聴衆の前に身をさらしたくない」「最近では聴衆のなかに自分より英語のできる人もいようだから」などの理由が挙げられている。韓国についての事情は不明である。英韓語の間に、とくに同時通訳を難しくしているなんらかの要因があるのかもしれない。

以上が、主として数字から読み取れる結果である。

2. アンケート自由記述部分 (項目 8~10) より

項目 8~10 の自由記述の問いには、回答者の多くから紙面いっぱいになるほどの記

述をお寄せいただいた。その内容は当然のこと、きわめて多岐にわたるので、以下、特に顕著な点についてのみ触れる。初めにそれをまとめると次のようになる。まず、もっとも顕著なのは、回答者 38 名（35 パーセント）が起点言語の日本語がなんらかの意味で「あいまい」なため英語にするにあたって困難を覚えるとしたことである。また、多くの回答者が日本人発言者・講演者のいわゆる public speaking の技能の稚拙さを、さらに 7 名もの回答者が「だじゃれ」や日本文化に極めて特徴的なことをなんの説明もなく述べることを into English 通訳の困難点として挙げている。さらに、11 名が日本語の構造・統語法上の特徴を挙げて、これが into English 通訳で困難をきたすとしている。主語が明示されない、動詞が最後に来て、しかも最後に否定文・疑問文になること、さらに同音異義語が多いことなどである。

さらに、into English 通訳を自分はどうか評価しているか、日本人の同僚の通訳を聞いたときにどのように感じたか、あるいはリレー方式で多言語会議を行うときに、他ブースの同僚がこれをどうか評価しているかについてのコメントがいくつかある。そして、方向よりも大切な要因があるとの指摘がいくつかあり、Into English 通訳は十分な訓練・研究が行われていないとの趣旨のコメントがある。

以下、こうしたコメントをいくつかのカテゴリーに分けて、実際の回答者のことばを聞いてみたい。まず、日本語のあいまいさに関しては、初めに全般的にこの点を指摘しているコメントを 3 つほど出し、さらにこれをいくつかに分類して詳細に見る。

2.1 into English 通訳はどこが難しいか

ここでもっとも顕著なのは、「日本語はあいまいだから英語にしにくい」という趣旨の指摘である。そうしたコメントに次のようなものがある。

- 「英語そのものより、日本語話者の日本語表現や話し方があいまいになりがちで（特に、主語がない、時制が飛び過去なのか現在なのか不明になる、presentation の仕方が身についていないので話が筋道立たず、単なる『おしゃべり』と化している, etc.）話者の意図するところ、本当に伝えたいことがわかりにくいため、訳しづらいということはよくあります。」（J22）
- 「言葉があいまいで、意図的にぼかしているのか、そのような話し方をされる方なのかの見分けがつかない時」（K21）
- 「日本語発言の意味が不明のことがよくあります」（J53）

「あいまいさ」にもいろいろあることがわかる。さらにこれを分類してみよう。ここではいちおう 4 種類に分類してみる。記述のなかでは分類は意識されていないことがほとんどであるため、同一のコメントで 2 つにまたがるものもある。こうした場合には、それぞれの範疇での回数に加えている。

1) 日本語のいわゆる「あいまいさ」についての一般的コメント

- 「日本語に特有なあいまいな表現があるから」(J5、J6、J25、J26、J31、J39、J45、K10、K11、K13、K16、K18)
- 「あいまいさが日本語の特徴なので」(J25)
- 「物事を曖昧にしておくことが良しとされる文化」(J45)
- 「スピーカーの日本語がひどい。意味不明で、訳しづらく、その点を、聴いている非日本人がわかってくれない時」(J2)
- 「日本人の質問があいまいで、何を聴きたいか不明確なため、質問の意図が伝わらない、あるいは、ずれた答えが返ってくるとき（逐次では質問者に確認できることが多いので、概して同時通訳で起こる問題）」(K13)

このほか、はっきりと「趣旨・意図・意味・論点がわからない」とのコメントも多い(J18、J21、J43、J47、J53、J55、K13、K15、K16、K18)。

2) 日本語の統語法、構造上の特質が困難をもたらしていると考えている場合

- 「主語が示されていない、わからない」(J5、J6、J7、J9、J18、J42、J43、J46、K15、K26)
- 「同時通訳の場合、動詞にたどりつくまでが長いセンテンスの訳出にいちばん困ります」(J7、J19、J34、K15)
- 「[通常文が]最後に疑問文・否定文となる」(J12、J19、J36)
- 「日本語の同音異義語。文脈からどちらか判断できないとき。例：たんしょく = 単色か淡色 (single color or light color)。かんさいぼう = 肝細胞か幹細胞か (hepatic cell or stem cell) (J17)——同音異義語の指摘は K12、K15 にもある。
- 「日本人話者の話し方が整理されておらず、結論がなかなか出てこないとき」(J34)⁶⁾

「日本語特有の表現」に難しさを見る回答者もいる(J52)。同様に「日本語でしか意味をもたないジョークや由来(歴史)を、事前資料なしで英訳する時(例：小泉首相が所信表明で触れた「米百俵」の話など)」(J36) / 「スピーカーが古い時代の日本語の引用を始め、理解に苦しんだ時。特にそれがスピーチの席で、通訳(者)に注目が集まってしまった時」(K24) / 「日本語のことわざや冗談で、英語ではその概念・意味が理解しにくいもの」(J23)。

3) 話者の public speaking のスキルに問題があるとしている場合

- 「スピーカーの話し方がへたで、何を言おうとしているのかわからない人の通訳をしなくてはならないとき。特に同通の場合、自分の考えがまとまっていない人の話は訳しにくい」(K9)

- 「international communication などのスキルが重要だと思う」(J45)

この他、この点に触れた回答に J42、J53、K13、K18 がある。

4) その他

- 「ジョークの通訳、だじゃれの通訳(で困った)。例：サンキュー、ヨンキュー、モロキュー、オバキュー」(J44)
- 「日本語のだじゃれに基づく冗談やロジックのない(と思われる)話を訳さねばならないとき(困難を感じる)」(J38、J41、J5、K14、K19、K27)

さらに into English の通訳環境をめぐる問題についていくつかの言及がある。

- 「通訳をするということは、英語、日本語が話せればそれで機械的に訳せると思われがちで、特に confidentiality の高いものに関しては事前に資料がいただけない、何の information ももらえないということがたまにあります。傾向としては米系企業(金融機関)に多く、“You just translate what I say.”と言われてしまいますが、[...] (通訳者の) best performance, best service を受けるためにも情報・資料提供が重要であるという認識を高めてほしいと思います」(J25)
- 「スピーカーが必要な情報を提供してくれないとき」(J35)
- 「内部・特殊用語の多用により、意味が不明確」(J34)
- 「社内(の会議)や関係者が多い場合、省略が多すぎたり、思い込みなどが多く、日本語の意味が不明の場合がある時(困難だ)。同時・逐次によらず。ただ逐次の場合は最悪。説明を求めることはできますが」(J43)
- 「通訳されることを前提としない日本人間の話し合いを英語に訳さなくてはならない時(例: 英語スピーカーが少人数の [場合の] M&A の会議など)」(J34)
- 「一人でウィスパリングをさせられること」(J13)

2.2 日本人通訳者の into English の通訳の評価について

非常にきびしい評価を相互にする、あるいは他ブースの同僚から受けていることから、反省の弁、そして責務を果たし終えた安堵の念など、多種のコメントが見られた。

- 「日本人通訳者の into E に耳をふさぎたくなる場面も経験している。中学英語で日英の同時通訳が可能であることをご存知でしたか。可能なんです。でも聴いていてとても恥ずかしかった」(J53)
- 「日本語の output (into A) ではなんとか合格点をとれていても、英語 (into B) となるとあまりにもひどい performance の通訳者を何人も(同僚として)経験

- してきました。L や R の区別ができない人、通訳技術以前の問題として英語の理解力が“根本的に”欠けている人等 [...]。ヨーロッパの通訳者に対して胸を張って『私たちは両方こなしてきた』とはとうてい言えないと思います」(J8)
- 「into B の通訳の場合、B 言語で output する言葉選びがたいへんであると思います。きつく聞こえたり、発音がだらしなく聞こえる (slang を使ったり、超アメリカナイズされている等) こともあるので、注意する必要があるのでは」(J14)
 - 「日英語以外の通訳者がリレーする場合に日本人通訳者の into E がわかりにくいという苦情を聞いたことがある」(K3)
 - 「英語が key 言語のリレーでは緊張します (でもこれは日本語が key でも同じ)」(J53)
 - 「『日本語ブースが functional だと非常にやりやすい』と別言語の通訳者から言われたこともあります」(J53)
 - 「日本語よりも (英語のほうが) 文法を意識するために、自分で言った文の文法が正しくないと思った時、その後の收拾が難しい」(J29)
 - 「ほんとうにこの単語の選択でよかったのか、この文章で通じているのか... と常に悩んでいます」(J4)
 - 「帰国子女でない日本人の通訳者の場合、やはり into Japanese にくらべて into English が劣ると思う。Non-bilingual の通訳者の into English を聴いていて、一番の問題は時制にあると思われる。単語・用語が正しくても、微妙な時制の使い方に誤りがあることが多い。横で聞いていて、発音よりも時制の使い方が気になることが多い」(J24)
 - 「日英と英日のバランスがあまりよくない会議通訳者が多いのも日本の現状だと思います。表現力や語感英語圏に住んで、かつ勉強して養う努力をしないとどうしても無理がでてくると思います。もちろん、同じくらい、あるいはそれ以上に日本語の表現力や日本についての常識が日本人の会議通訳者には求められます」(J36)

逆に、その職責を果たし終えたことを自覚して、安堵するコメントも見られた。

- 「Le Monde に日本の大臣の通訳が verbatim で載った」(K24)。——この場合、原稿を前もってもらっていて、準備ができたことが記されている。
- 「日本人のスピーカーの何を言っているのかわからない下手なスピーチを理解するのは大変。でも、英訳したあと、両言語の分かる人に『あのひどいスピーチをよく理解できる英語にさせていただいて助かりました』と言われると気持ちがいい」(K25)

- 「会議終了直後に、ロシア語、フランス語のブースから『よい英語を出してもらって助かった。とても clear でフランス語にするのが楽しかった。ありがとう。おめでとう』と数度、言われたことがある」(K26)

上記の最後の例は、ロシア語の同僚からのコメントで、日本人がこの会議の議長を 2 日ほど勤めたのを通訳したあとのことである。この分野の仕事を何年もして、事情もかなりわかっており、議長をした日本人役員と面識もあった。フランス語の同僚の場合、都市の歴史についての講演の通訳であったが、大学時代に経済史を専攻し、かなりの予備知識があったとされる。また、「科学技術系の仕事为主である立場からいえば、少なくともアジア地域では英語は共通語になっています。聴衆も英語が非母語の通訳を聴くことに慣れています。医学分野に限ってみても日本語母語の通訳の専門知識レベルは非常に高いものです。単にテニヲハをつけているだけではなく、医学的意識も可能ですし、医師・歯科医師のように通訳することができる人材も豊富です。この分野は打ち合わせもきちんと行われることが多いので（質的に高い仕事が行われており）、クライアント側の通訳業務に対するサポートも平均より多いのです（J54）」という事情もある。

2.3 通訳の方向より重要な要因があるとの指摘について

これにはふたつの論点が提起されている。ひとつは、双方向ともそれぞれ異なった難しさがあるので、一概には言えないという趣旨、いまひとつは、通訳にあたってはそもそも方向より重要な要因があるという趣旨である。第 1 の趣旨については、以下のようなコメントが見られる。

- 「（私は）長く英語圏で生活したことがないので、やはり output の質は into E (into J の間違いか——筆者注) のほうが良いと思うが、聴くことについては日本語のほうがはるかに楽に、正確に聞き取れるわけなので、トータルすれば方向はそれほど変わらないように思う」(J52)
- 「どちらが comfortable かの方向をいちがいに言うのはむずかしい。日英のほうが確実に聞き取ってニュアンスをつかめるので、気分的に楽なような気がする。一方、母語は日本だから、英日のほうが困った時にも output はきれいにまとめられるような気がする」(J27)
- 「into A の場合は、訳出が日本語なので、訳出が母語 [...] になりますが、聞き取りが困難な場合があります。どちらもそれぞれ別の場面で困難がありますが、全体的な困難度は変わらないと思います」(J51)

第 2 の論点は、通訳をするときの難かしさでは、into A か into B かという方向より

も、たとえば分野・テーマ、通訳者のもっている背景知識、準備ができたかどうか、話者の話し方、あるいはスピーチの種類などのほうが重要だという指摘である。これは、AIICの規定自体、あるいはこの調査自体にそれほどの意味はないのではないかとの意味があると考えられる。

- 「日英・英日にかかわらず、原稿の入手、テーマ（内容）、話者の話し方が、より通訳の結果に決定的な影響をもつと思います」(J48)
- 「理系の分野に置いては into A, into B 両方ともに可能です」(J31)
- 「into A であれ into B であれ、その通訳者のその分野に関する知識の深さと、発表者の情報をいかに解釈・再表現できるかの能力によって通訳の出来・不出来が変わるように思えます」(J39, K9)
- 「(どちらがより comfortable かで) どちらとも言えないのは、なんとしてもあまりに他の要素が強く関係し、自分が発声する言語が何かだけでは [...] 決められません。もちろん、通訳でなく、自分が個人で話すときは日本語が comfortable ですが、通訳をする時には両言語ともあるレベルに達している通訳者なら、それだけでは言い切れないと思います」(J29)
- 「 $A \rightarrow B$ 、 $B \rightarrow A$ のやりやすさはテーマ、話者により一概には言えない。原稿が出るよりも、打ち合わせをして talking points がわかった上で、相手が自由に話してくれるのが一番やりやすい。これは、おそらく話し手の側の感情移入により point が明確になるためであろうと思われる。また、内容についての熟知度が増すことで行間が読め、そのことで $A \rightarrow B$ にせよ $B \rightarrow A$ にせよ、効果的・効率的な訳出が可能になるとと思われる」(J15)
- 「どのような通訳の形態であっても、事前に資料が出ていると的確な準備がしやすく、パフォーマンスも向上すると思います。また通訳をする前に『スピーカーはいったい何を話すのだろう』と不安になることがなく、だいたいの流れを事前に理解していれば、多少、実際のスピーチと違うことが話されても臨機応変に対応できると思います。特に日本語特有の表現や冗談をその場で即座に訳すことは困難だと思います」(K2)
- 「精通しているテーマほど $A-B$ と $B-A$ の差が小さくなる。反対に、精通していないテーマほど $B-A$ と $B-A$ の差が大きくなる」(J13)

2.4 into English の通訳の訓練・研究の不足について

この点については、かなり強い指摘が4名の回答者から寄せられた。

- 「日本での通訳訓練においても into E の練習量が少ないように思える。日本語話者以外の日英語通訳者が少ない現状を考えると、日本人通訳者の into E のレ

ベルをもっと高めていく必要があるのではないか」(K4)

- 「into B の通訳訓練の場合、into A に比べて『訳出方略』が充分に開発されていないと思います。この方略の開発が into B の通訳教育のカギではないでしょうか」(K3)
- 「日本国内での仕事では into Japanese が重要視され、into English はおまけ扱いされていることも多く、そのせいかどうかはわかりませんが、通訳学校などにおける into English のトレーニングの機会なども充分とはいえない気がします(昔の話で、今は違うかもしれませんが)。また、正直言って、逆に、教える側としても日本語が母語かつ帰国子女でもない人間にとって into English の指導は少々きついものがあります。Into English の立場の改善、指導方法、トレーニング方法の確立が望まれます」(J22)
- 「into B の訓練では細かいところでの文法の正しさを重視してもよいと思う。別に複雑な文を作れというのではなく、基本文法のあたり前のこと(単数複数の扱い等)をきちんとできることが大切だと思う(もちろん、内容を伝えることが一番大切で、同通では完璧な文章ばかりで訳出することが難しいのも事実だが)。そのため、個人的には時間を置いて訳を推敲する翻訳の勉強が役に立った。また、いたずらに難しい単語を選び、不自然な表現になることは避けるべきで、時に通訳がこれをしているのは聴衆にとってはデメリットにこそなれ、何のメリットにもならないと思う」(J28)

2.5 その他の論点に関するコメント

自由記述欄のコメントは実に多岐にわたっているため、その全容を報告はできない。たとえば、日本語非母語話者による通訳(双方向)、通訳職をめぐる状況について、あるいは英語国における生活体験の意味については、興味深く、かつ場合によってはとくに参考になるコメントも多く寄せられた。ここではこれらを割愛して、これまでの経験から into English の通訳をする際、あるいはさらに勉強する際に参考となると思われるアドバイスを列挙するにとどめる。

- 「訓練で into English も大いに可能である。そのためには<コミュニケーション能力 + sensibility + 文化 + 言語>が重要と思われる」(K23)
- 「音読が役に立った」(K28)
- 「わかりやすい英語を出すことが大切だ」(J26)
- 「英語の時制を正確に」(J24)
- 「翻訳することが通訳にも役立った」(J28、K28)
- 「日本における into B、すなわち into English で、英語圏の一般教養である聖書(教養とっていいかは別としても)、Shakespeare, nursery rhyme の3種の

神器は必要でありましょう」(J18)

3. 若干の討論

このような回答者の挙げた点について、多少とも論点を整理し、論じてみたい。ただし、コメントは実に多岐にわたっているため、全体を論じることが筆者の能力にあまる。また、たとえば通訳経験の多少との相関や海外生活の経験の多少との相関など、より興味深い分析も可能であろう。こうした分析のためには、アンケートの質問事項にさらなる工夫もありえたことを承知している。さらに、こうしたアンケート調査に対する方法論的な疑義も提示されている。「通訳者に対してこのようなアンケートでわかることは、かなり主観が入っているので、主観的なものをたとえ 20 人あるいは 30 人あわせても、あまりそれを合計してみたところで、インパクトのあるような結論になるかどうか、正直疑問です」(K1) というものである。これはまったくもったもな疑問である。ここでは、このように通訳者が感じていることをひとつの事実として受けとめ、それを出発点とするということで先に進みたい。したがって、ここに提示されているのは、あくまで日本人通訳者の自己認識(の一部)である。

内容についての分析に移ろう。まず、動詞が文末に来て、しかもそれによって文章全体が否定文や疑問文になることがあり、into English の同時通訳で困難をきたすことがあるというのは、このように多くの回答者がこれを挙げていることから、現実にはまさにそうだとまず認めなくてはならない。ただし、これらのことはありていに言えば、日英両語の間の語順の違いである。これが原因で同時通訳が難しいということは、そもそも同時通訳は難しいものだということを言い換えたに過ぎない。また、語順の違いは、どのような言語ペアの間にも多かれ少なかれ必ず存在する。たとえばドイツ語でも従属節内では(助)動詞が最後にくる。しかも、日英語間の語順の違いとしては、たとえば、日本語では修飾句・節が必ずそれらが修飾する名詞の前に来なくてはならないのに、英語では後にくることのほうがより大きな困難をもたらす場合も多い。

筆者は、率直に言って、このような困難を乗り越えるための戦略・戦術は、プロの通訳者はふんだんにもっていてしかるべきだと感じている。そもそも、それほどぴったりと日本語の語順に従って英訳をしていてはならない。疑問文・否定文になることは予測が可能な場合も多く、いったんは中立的な英語の動詞を使っておいて、あとで言い換える、埋め草的な表現をいくつか用意してそれで時間を稼ぎ、あとで悠々と追いつく(英語としての自然さ・優雅さを犠牲にせずにこれを行う)などの、いわば<秘訣>を蓄えていていい。当然のことながら、こうした手立ては実際に通訳者が日々、駆使しているに違いない。そうしたものを体系化する作業が行なわれてよい(実際に通訳をしている者は種々のプレッシャー下、いわば「火事場のばか力」を出しているため、そのような手法を意識して記録するということに注意が向かないという難しさがある)。

ただし、この他にも、日本語の統語法の特徴から into English 通訳が難しくなる場合がある。たとえば、日本語では主語を示す必要がなく、名詞の単数・複数もほとんど明らかにせず、冠詞がなく、多くの場合、英語の代名詞の所有格で表しているものを表現しないなどといったことに由来するものである。こうした場合、英語では欠かすことのできない項目について、日本語にない情報をどこからか仕入れてきて補わなければ英語にならない。日本語をよくするアメリカ人の友人と日本語で話していて、「きのう動物園に行ってね」と言ったら、間髪を入れず「だれが」と聴かれたことがある。「郵政民営化法案」は実は6つの法案の総称であるから、英語では、‘the postal services privatization bills’ と複数にしなくてはならないし（そういえば postal service も複数である）、そうするための情報は直接的には日本語の表現からは得られない。「私は、ドイセンベルグ氏とはオランダ時代から親交がありましたので…」を、“I had known Mr. Duisenberg very well since…” と言って、since MY Dutch days とすべきか、since HIS Dutch days とすべきか、あるいは since OUR Dutch days とすべきかに迷ったことがある。おそらく、英語としては何かを入れるのが自然なのであろうが、現れた日本語からだけではこれを判断はできない。結局、話者にオランダ駐在の時期はなく、Duisenberg 氏はオランダの銀行家（後の初代 EU 中央銀行総裁）であるから、HIS が適切であろうとの判断を通訳者としてせざるをえなかった。これを決めるには以上のような知識・推定が必要である。

こうしたことから、暫定的に‘English requires greater precision.’ だ、よって日英通訳には、逆方向よりも多くの予備知識、準備などを必要とする」とは言えるかもしれない。エドワード・ホールの概念を借りれば、「high-context 文化の言語から、low-context 文化の言語に通訳・翻訳するには、逆よりもより大きな背景の知識を必要とする」と言ってもよい。high-context 文化とは、コミュニケーションの場におけるコンテキストが多く役割を果たすので、言語自体はそれほど多くの情報を伝えなくてもいいような文化で、日本文化はその典型とされる（もちろん、ここでいう文化とは人類学や社会学でいう文化のことであって、一定の集団が分かち合い、世代から世代に受け継がれる生活様式の全体のことである。いわゆる high culture 芸術、文学、音楽などのみを指すものではない）。だから英語では、*I have a book in my hand.* と言うが、日本語ではイタリック部分に当たるところはふつう言わないほうが自然である（代名詞を使わないことを意識して邦訳をしている翻訳者もいる）。リレー通訳において日本語を pivot にするのが不適切なのはこのためである。

ただし、この逆も言えることを忘れてはなるまい。英語で brother と言えても、日本語ではその人が年上なのか年下なのかを指定する、ないし知っていなくては「兄」とすべきなのか「弟」とすべきなのか分からないため、素直な日本語にできない。これはハンガリー語でも同じだと理解している。英語では President 一語で済んでしまう場合も、これを日本語にしようとするとは簡単ではない。共和国の「大統領」、しかも

中華人民共和国の「国家主席」、中華民国（台湾）の「總統」、さらにアメリカ連邦議会上院の「議長」、通常の企業の「社長」、銀行の「頭取」、組合の「委員長」、大学の「学長」ないし「総長」、省庁の場合には「長官」などの場合もある。同様に、たとえば *real* という形容詞は、日本語ではいろいろの場面に応じて細かく訳し分けられる。（哲学では）「実存の」、（経済学では）「実質の」、（光学では）「実像の」、（数学では）「実数の」、（音楽では）「真性の」、（不動産では）「不動産の」、（絹を扱うときには）「正絹」などである。Anthropology はいつも「人類学」と訳されると思っていたが、神学・哲学では「人間学」としていることを筆者は最近になって知った。こうした場合、日本語のほうがよほど *greater precision* を要求するといえる。かなりのことが分からなければ、このうちのどれが正解なのか判断できない。そもそも、英語では大統領でも小学校の友だちでも “You” ではないか。“It’s very hot today, isn’t it?” と簡単なことを日本語で言いたいような場合でも、相手の相対的社会的立場などがわからないと文を終えられない。「暑いな」か「暑いねえ」か「暑いですね」か、あるいは「お暑うございますね」などとしないと日本語にならないからである。これは「言語の相対性」の一側面なのであるから、当然ではある。ある回答者はこう言う 「into Japanese の場合、同じ英語の単語でも分野で訳語が変わるし、特に同通の際、ニュアンスを細かく伝える十分な時間がないので、真の意味での難易度が高いと思う」(J39)

しかも、実際に国際会議で使われる種類の日本語で、話題にされる種類の主題について、日英語のうち、どちらがより高い精密度を要求するかを測定することは、極めて困難であろう。場合を特定してでも、統計的にこれを究明したような研究があれば、ぜひとも目を通してみたい。

ただし、言語と言語の距離は言語ペア間に違いがある、とは論じられるかもしれない。たとえば、インドヨーロッパ語族に属する言語間の距離は、非インドヨーロッパ語族の言語が起点言語・目標言語のどちらかに入っている場合に比べて、より小さいとは言えるのではあるまいか。たとえば、英語とフランス語との通訳をするときよりも、英語と日本語との通訳をする時のほうが、より大きな距離をカバーしなくてはならないとは言えないであろうか。そして、そのために必要とする背景知識の量はそれだけ大きくなる。

インドヨーロッパ語族間では、統語法（文法）が似ているということの他に、意味論学者の Ullmann がいみじくも「共通の国際的起源をもつ語彙」⁷⁾ と（誤って、あるいは不注意に）呼ぶ語彙があるかないかの違いも大きい。ただし、似ているのでかえって影響を受けやすく、自然な目標言語になりにくいということもあるようではある。Robin Setton 氏が ‘false friends’ と呼ぶ場合である。漢字を使う日中間の通訳でもこのような事情があろう。

さらに、「日本語（単語）の英訳がわからない場合。英→日のときはカタカナで出すが、逆はそうもいかない」(J14)。「into Japanese では術語はそのままカタカナ言葉で

[出して]その場は「逃げる」ことができる（あるいは場合によってはそのほうがよく分かってもらえる）のに対して、逆は不可能で、into English の時にその英訳を知らなければどうしようもないという事情がある」（J3、J20、J22）/「日本語の難しい専門用語の正確な英語訳がわからない場合。最近の英 - 日通訳の場合は、学会が定訳を決めていない日本語に無理にするより、そのままカタカナで訳すことを望まれるが、日 - 英だとそのまま言っただけでは伝わらない」（K22）/「専門用語の英訳が不明（の時に困る）」（J21）。このような場合は、より一般的なものを指す総称語で逃げるか、説明するしかない。

しかし、聴いたものを理解できない、あるいは誤解してしまうということは、単一言語内の会話にも起きうることである。もちろん英語でも起きるとされる。*You Just Don't Understand.*（『ほんとにわかってくれないのね』）とは、高名な言語学者 Deborah Tannen による夫婦間のコミュニケーションの断絶を扱ったアメリカのベストセラーである。

少し前、わが家でもこんな会話があった。妻が、筆者の父が久しぶりに訪問したのに気を遣って、「今朝は特別に、朝風呂、どうですか」と問う。父は「いや、いいよ」と答えるのを聴いて、妻は風呂は立てない。しばらくして息子が「おかあさん、おじいちゃんが風呂はまだかって言ってるよ」というのである。

「話し手の言っていることを忠実に英訳しても聴き手にとっては It doesn't make sense. となり、通訳者のせいにされる（のがつらい）」（J8）とのコメントがあった。これについて考えてみたい。

日本人通訳者の感じている難しさで、「言語明瞭意味不明」と形容される種類のあいまいさがある。「個々の単語も表現もよくわかり、言語のレベルでは英訳できるのだが、では、だから何なのだということ、それが分からない」⁸⁾ という種類の理解の難しさである。これについて、「言葉があいまいで、意図的にぼかしているのか、そのような話し方をされる方なのかの見分けがつかない時（が難しい）」（K21）との指摘がある。

筆者の国務省時代の上司 James Wickel 氏が、こんな述懐をしたことがある——ある日米交渉の通訳をしていて、日本の大臣の発言を通訳したところ、アメリカ側の交渉担当者が Wickel 氏のほうを向いて曰く、“What's the heck is he trying to say?” と。Wickel 氏、顔色ひとつ変えず、「ただ今の発言はいったいどのようなことをおっしゃりたいのでしょうか」とこれを日本語に訳した。彼曰く、“I am not going to interpret the Minister for him. It's his job to do that.” と。

つまり、もしこのベテラン通訳者の言ったことに意味があるとすれば、こういうことになろうか——「忠実に英訳」しようとするれば、それができるならば通訳者としてはそれをすればいい、それ以上は交渉担当者同士の責任で詰めていくべきだ、と。「言語明瞭意味不明」といわれる場合、もし「言語明瞭」ならばそれを「明瞭」に訳するのが任務だとも言える。それ以上のことは、通訳者としては越権行為ともとられかねな

い。たしかに「意味不明」の部分を「通訳が拙劣だから」ととられるのはつらいが、それを避ける方途もいくつか準備しておいていいのかもしれない。Wickel 氏の対処の仕方はそのひとつである。さらに筆者は「どうもまとまらないお話をさせていただきます...。いちおう以上で終わります」などの発言があった時には、多少「まとまらない話」の部分を強調することがある（“I apologize for having spoken -- maybe irrationally, illogically, in a hodge-podge manner, with little cohesion.” など）。ただし、TPO を心得ていなくてはならない。

通訳者として、発言者の「意図」まで踏み込むべきかどうかは非常に大きな問題であろう。話し手が、言語表現として表現していることと異なること、あるいは逆のことを「意図する」ことはそれほど稀なことではない。英語でも「No とわずに断る方法」は 21 もあるとも言われる。同じ考えや感じを en-code するにも、その方法は複数ある。「お腹がすいている」と言おうとして「今、何時だい」と言う。あるいは、これは「会議を中断して、休憩をとったかどうか」、もしくは「昼食に入ろう」という「意図」かもしれない。しかしそうではないかもしれない。どちらにしろ、この「意図」を通訳者として目的言語に訳すことは適切ではあるまい。中国語でも、丁寧に断る代わりに「考慮、考慮」と言うと言っている。できればあいまいさはあいまいさのままに残しておくのが一番であろう。政府の白書などを多く翻訳している筆者の畏友は、まさにこれを言う。「同程度のあいまいさ」がはたして達成可能かが問題になるうが、究極的にはこれはその場に立たされた通訳者の判断によるとしか言えまい⁹⁾。

これまでの通訳研究の文献では、起点言語の理解に困難をきたす場合について触れたものを、筆者は寡聞にして知らない¹⁰⁾。AIIC の言語分類では、C 言語は *passive language* 聴いて分かり、他の言語に通訳するが、その言語に通訳することはない言語とされている。しかしその C 言語でさえ “a language of which the interpreter has a *complete understanding* and from which he interprets.”（通訳者が完璧に理解でき、他の言語に通訳する言語 引用英文のイタリックは筆者）¹¹⁾ とされている。韓国でも起点言語の理解を問題にすることはなく、と Lim 教授は言う。

しかし、10 年近く英語国で過ごした回答者も「(英語の) 聴き取りが困難な場合があります」(J51) という場合があるのに加えて、回答者の約 3 分の 1 が母語でさえ、種々の原因から、理解に困難を感じるという。Into Japanese の通訳についても、起点言語の英語のディスコース理解は、現実においても訓練コースなどにおいても、課題である。浅野輔氏は「通訳というのは原文の理解がほとんどで、それ以外はトッピングのようなものだ」と言っていた。そもそも「完璧な理解」というものが可能かどうかという哲学的な問いは差し置いても、起点言語の理解に関する研究も必要ではあろう。

筆者は、究極的には Max Weber の言った社会科学の方法論上の要請 (Wertfreiheit) という態度が決め手になると考えている。この概念にはふたつの解釈がある。ひとつは「科学研究にたずさわる時は自分の価値観を入れてはならない」としたのだという

解釈で、「没価値」と訳され、英文による社会学入門書などではこのような解説が多い。第2は「価値自由」と訳し、「科学研究にたずさわる時にも、自分の価値観を捨てられるはずはない。それがなければまず出発点になる問いそのものがないし、解釈もできないし、もっとも重要な職業を実践するときに自分の価値を捨てなくてはならないというのは無意味で、ウェーバーはそんなことは言っていない。そうではなくて、自分の価値を一時的に、理論的に、横に置いておいて（それから自由になって）、相手の価値からその発言・著作を解釈してみるという態度のことだ」とする解釈である。日本のウェーバー研究者はこの説をとるものが圧倒的に多い。

それを実現するにはどうしたらいいか。学者が学者の物を読む時には、互いを熟知していることが多い。しかし、われわれが通訳するすべての日本人話者についてそれを行うことは不可能である。だから、少しでもそれに近づく、そのテーマについて知る、その人が書いたものがあればそれに目を通す、原稿をもらったら予習をする、などになろう。さらに、感度をよくする（sensitize oneself）、想像力を働かせる、というようなことになるであろうか。「通訳者はスピーカーと一心同体でいることが必要と感じています。ですから、テーマ、話者の話し方、さらに聴く側のことを広く理解していく必要があります（とかく平坦な話し方の通訳者が多いのですが、やはり話者の（もちろん場合によりけりですが）想い、情熱、喜怒哀楽を共感共鳴できる通訳者になろうと日々努力の毎日です）（J55）」とする回答者もいる。

もし日本語発言の理解がとくに難しいということがあるとすれば、日本語を母語としていない通訳者たちにとって、これはさらに大きな困難点になることが考えられる。「特に日本語を考える場合、話者の public speaking 能力が必ずしも高いとは言えない場合が多く、同じ日本人でさえ内容の理解に苦しむこともしばしばなので、J into A はさぞかしたいへんな作業であろうと推察いたします」（J53）。なかでも、見事な into English をする英語母語者もいれば、「デリバリーはよかったが、内容的にはこれが通訳かと思われることもあった」（K12、さらに同趣旨は J28, J43）との指摘もある。こうした場合、デリバリーがスムーズで説得力があればあるほど、危険度は高いと言える。ということならば、「into B のほうがよりリスクが少ない」（K12, K16, J53）、「やはり A into B は理にかなっているように思います。」（J53）とも言えよう。少なくとも「into A のほうがたやすいという前提は誤り」（K23）であろう。

最後に、into English 通訳の研究・訓練の不足について触れよう。たしかに「正直言って [...] 教える側としても、日本語が母語かつ帰国子女でもない人間にとって into English の指導は少々きついものがあります」（J22）、「日英通訳訓練は方法が確立されておらず、講師も最初から諦めているようなところがある。帰国子女の [受講生に対して] しばらく練習すればできるようになるという以上の方法論を語れる講師がいるだろうか」（J16）という指摘もあるが、そうかといって、経験の蓄積や研究が皆無ともいえない。Into English 通訳に触れた案内書もあるし¹²⁾、こうしたものからいくつ

かの戦略・戦術¹³⁾を読み取ることが可能でもある。

しかし、より体系的にわかりやすく日英通訳を論じ、それを教材の形にまで仕上げることはやはり今後の課題である。また、訓練においてもさまざまな工夫が必要とされよう¹⁴⁾。すでに仕事をされている方を対象とした refresher course などが提供されていい¹⁵⁾。その前に、日英通訳に関する研究会などが立ち上がってもいい。

4. あとがき

into English の通訳は、日本人が外に向かって発言する際に決定的な意味をもつ。日本がさらに国際社会とのコミュニケーションをさかんにすることが国民的課題だとすれば、その重要な一端を担う通訳者の任務は、まさに「高貴なる責務」であると言える。しかも、われわれが英語を始めとする外国語への通訳をするという事情は、今後も変わることはあるまい。そうだとすれば、できるだけ良い into English 通訳ができるよう、われわれ自身が努めること以外に選択肢はない。そのためには、英語を母語とする通訳者・非通訳者の助力を得ながら、われわれの経験から学びあうことしかあるまい。課題は大きいし、多い。

たしかに「日本では、into A も into B もこなしてきたというのは、通訳者の availability の問題で、仕方がなかったから」(J8)であるから、これを矯正して、十全なる into English の通訳を提供するだけの力量が日本の通訳界になくしてはならない。そして、available でないという状態はその時の偶然の状態ではなく、今日は available でないが明日は available だということにはならない。available でないのは国際政治・経済・文化的な問題、いわば言語のもつ political clout の問題であって、一朝一夕に変わることは期待できない。日本語はまだいいほうである。世界で日本語を学んでくれる人々がいる。世界に何千という言語がある中で、母語への通訳を原則とすることは傲慢のそしりを免れない。Into B の通訳は常に必要とされ、その手法は広い意味をもちうる。

今回のアンケート調査は、通訳者に対して行ったものであるから、いわば通訳者の自己認識を問うものであった。われわれ日本人通訳者の into English の通訳の評価については、たとえば顧客、さらに他ブースの同僚の評価が参考になろう。中国で同様の調査をしようという話も進んでいる。これができれば、ささやかながら、韓日中の比較ができる。また、このアンケートを題材にしてさらに多くのことを論じていたきたい。

筆者自身は実はこの調査を行って本当によかったと思っている。どのような科学的研究にも事前に作業仮説があるのは当然として(これがなければそもそも問い自体が存在しないので、調査・研究が始まらない)、その仮説の一部は明らかに修正を求められた。しかしこれは当然のことである。これこそまさに実証研究の意味だから。調査の結果として仮説はさらに豊かになり、さらに実証を要求する新たな作業仮説も生ま

れる。こうした科学の方法論の大綱を実感できた。さらに、筆者へ励ましのことばさえいただいで感激したことを付記する。

しかし、それにもまして感動したのは、自由記述部分の多くのコメントを通して、同僚たちの真摯な日々の苦闘を目の当たりにしたことである。「鳥は飛ばねばならぬ」のなら、「通訳者は通訳をしなくてはならぬ」。

【謝辞】アンケート調査に当たっては、筆者が直接に連絡のとれる通訳者に加えて、日本コンベンションサービス株式会社のご好意によって、その通訳者リストに登録されている方々にアンケートを送付していただき、かつ回収していただいた（個人情報保護のため、筆者にはお名前・住所などを明かしていただかなかった）。このような好意がなければ、意味のあるアンケート調査にはなりえなかった。記して感謝したい。また、忙しい中、アンケートに回答をお寄せいただいた通訳者のみなさまにこの場を借りて深く感謝したい。多くの方に、自由記述の項目にたくさんのご意見・観察・提案などを書き込んでいただいた。このような協力の姿勢に感動している。

著者紹介：近藤正臣 (KONDO Masaomi) 大東文化大学経済学部教授。日本通訳学会創設メンバー（初代会長）。前 AIIC シニアメンバー。ILO 総会、PTTI 元会長山岸章氏付き、日米議員委員会など多様な通訳経験をもつ。主な論文・著書・翻訳書に "Japanese Interpreters in Their Socio-Cultural Context", "Cassette Effect in Translation Words in Japanese", 「オーストラリアの多文化主義とアジア化」、『開発と自立の経済学』、Hisao Otsuka, *The Spirit of Capitalism*, E. A. リグリー『エネルギーと産業革命』などがある。
Email: omikondo@amber.plala.or.jp

【註】

- 1 例えば、Donovan, Clare (2004), 'European Masters Projects Group: Teaching Simultaneous Interpreting into a B Language-Preliminary Findings,' *Interpreting*, 6:2, pp. 205-216 参照。
- 2 Hyang-Ok Lim (2003), 'Interpreting into B: To B or not to B?', *Forum*, vol. 1, no. 2, pp. 151-171.
- 3 問1で、「回数」(英語では how many times...?) という経験の測定の仕方には多少の混乱があったことが回答者のコメントから伺われる(3日続く会議は3回とするのか1回とするのか、など)。AIICでは「日数」で測定しているので、このほうがよかったかもしれない。実際に日数で数えたとした回答者もいる。ただし、回答者の80パーセントの方にとっては実質的な違いとはならなかったと思われる。

- 4 韓国では、会議通訳者といえばほとんどが Lim 教授の所属する Graduate School of Interpretation and Translation, Hankuk University of Foreign Studies 出身者で、そこに入るための予備校ができてたりするほどの競争である。韓国でも通訳職は人気があることを示すと同時に、優秀な人材が集まってくることが想像できる。お隣の韓国では大学院翻訳通訳研究科が 26 年も前にできていた。ここでは日韓・韓日の通訳も教えている。
- 5 同教授からの 2005 年 6 月 13 日付け e-mail 通信。
- 6 日本語での発話で「結論がなかなか出てこない」をここに挙げたのは、日本語の段落と英語のパラグラフとはその構造に違いのあることを日本語の特色のひとつと見たためである。
- 7 Ullmann, Stephen, 1977, *Semantics: An Introduction to the Science of Meaning* (Oxford: Basil Blackwell)
- 8 今井邦彦「日本語は本当に曖昧か」(『文藝春秋 3 月臨時増刊号』、2005 年 3 月 28-30 ページ)で論じているようなあいまいさは、本来、問題にもなるべきでないような「曖昧さ」である。今井は、「～とか」、「～みたいな」のような曖昧さはどの言語にもあり、ことさら日本語だけが曖昧なのではないと論じている。
- 9 したがって、Seleskovitch の「意味の理論」でこの「意味」の中に(あるいは同様に、Kirchhof などの「3 者 2 言語理論」で das Gemeinte (what is meant) の中に、話者の「意図」が含まれているとすれば大きな問題を引き起こしかねない。筆者は「通訳者が話者の〈意図〉を通訳する = 解釈するべきかどうかは a moot question である」としたい。Kondo, Masaomi, '3-Party 2-Language Model of Interpreting Revisited,' in *Forum*, 1-1 (January 2003), p. 83.
- 10 タンペレにおける FIT 分科会での報告のあと、イタリア人参加者からもこの点の指摘があったのは興味深い。
- 11 AIIC, *Advice to students wishing to become conference interpreters* (1993 edition), p. 3.
- 12 例えば筆者はただちに次のような文献の該当箇所を思い浮かべる。福井治弘・浅野輔『英語通訳の実際』(研究社、絶版) 日本コンベンションサービス通訳部『プロの明かす英語上達のコツ』(講談社、絶版) 近藤正臣 (1988) 「通訳者はいかに文化を乗り越えるか」『大東文化大学教養課程 20 周年記念論文集』61-78 ページ(ただし逐次通訳にしか触れていない)。また、一般的にすぐには入手できないが、このテーマについて書かれた修士論文がいくつかある。
- 13 日英同時通訳の方略として、上述の回答者からのアドバイスの他に、一般には以下のようなものが得られる。
 - ・ 日本語を表面的に英語に「直訳」したり、あまりぴたりついて日本語を追いかけない。
 - ・ 英語で主語はできるだけ待って表現すること、したがって、日本語で「...は」と

- 出てきても決して直ちにそれを英語の主語として訳さない(「実は私は、…」と聴いても決して直ちに飛びついて、‘In fact, I…’ などとしないこと)。
- ・ どのように英文を始めるかということは文章をどう続けていくかに重大に意味をもつので大いに工夫が必要なこと。‘We have …’, ‘There is …’, ‘When it comes to …, …’などの始め方は、後にもってくるものに自由度が高いので便利である。
 - ・ 英語の不定詞や分詞構文の用法を駆使すること。不定詞の「結果」を表す用法は応用範囲が広い。
 - ・ 日本語の発話における論理・事態の流れなどをできる明快にとらえて、因果関係ならば because of …, due to …, owing to …などの前置詞句、あるいは逆ならば resulting in …, bringing forth …, begetting …, generating …などのできること、出来事の時間による経過を示すには、たとえば A follows B; A comes after B、あるいは逆に B is followed by A. などの表現のストックを身につけておくこと。
 - ・ 付帯状況を示す前置詞 with は極めて利用価値が高い(この後に、意味上の「主語 + 述語」を持ってこられるので。実はたいていの前置詞はこれを行えるようである)。
 - ・ 英語における言い替えが自由にできるように訓練をしておくこと。
 - ・ “a small built-in thesaurus” を自分で作って、常にもっていること。
 - ・ 細かいことを言えば、英語でも文末で否定文にすることは大いに可能である。“She was a devout Christian. But while in Japan, she went to church *hardly ever*.” あるいは “We have a heavy agenda in the morning. So, let us take rest *as little as possible*.” などはその好例であろう。
 - ・ 日本事情を英語で説明するにはどのような表現が可能かについては便利な本がいくつもあるし、定型のある挨拶文などは自家薬籠のものとしておくべきであろう。ピンカートン曄子・篠田顕子 (2005) 『実践英語スピーチ通訳』(大修館書店) が便利である。
14. ちなみに、大東文化大学大学院経済研究科の通訳訓練では、実習時間のほぼ半分を into English の通訳訓練にあて、英語を母語とする(ないしそれと同様の)訓練者を置いている。ヨーロッパでも、英語を母語とする訓練者とそうでない訓練者がともに行う team teaching の方法が模索されている。
15. これは、前 AIIC 会長で、バンコク在住のためにアジアにおける通訳事情を熟知している Jean-Pierre Allain 氏の提案でもある。

